



心を科学する 「心理学」の魅力

十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科 教授

池田まさみ (いけだ まさみ)

出前授業のきっかけ

現在、日本心理学会主催による「高校生のための心理学講座」が全国7地区14大学で展開されています。私も関東地区Iに参加させていただいておりますが、実は、私自身の心理学に関する出前授業は、2005年12月に、都区内立中学校で行った「こころを科学する—ものの世界と見えの世界」という授業が最初になります。

きっかけは、「子ども向け“こころの科学”教育：科学的思考力を育む知覚学習キットの開発研究」（科学研究費補助金、萌芽研究、2005～2007年度）のなかで、小・中学生にも「心を科学する“心理学”の魅力を知ってもらいたい」というねらいから、心理学的現象（例えば、錯視）を素材とした「科学教育」の教材開発や授業実践を試みたことにあります。その背景には、心理学専攻であっても、心理学が「人間科学」の一分野であることを理解している大学生が案外少ないこと、また、一般にイメージされる心理学と学問としての心理学研究との間に乖離があるのでは？という思いがありました。

子ども向け「心理学講座」を始めるにあたり、まずは現場の先生方を対象に模擬授業（つまり営業！）を行いました。小・中学校いずれの先生方にも、授業内容だけでなく、心理学そのものにも興味をもっていただき、嬉しく思ったことを覚えています。ただ、小学校では1年間のカリキュラムが詳細に決まっております、時間的にもタイトなため、小学生には「サイエンス教室」などで実施するとして、まずは中学校で、「選択理科」の時間に出前授業をスタートしました。

授業で伝えてきたこと

授業では、ずばり「人間を科学する」と題しています。小学生から高校生まで、一貫して伝えていることは、やや乱暴な言い方になるかもしれませんが、「心理学では世界を二分する—外界（客観世界）と人間（主観世界）—という考え方に立つ」ということです。授業では共通して、①心理学的な現象を「体験する」、②外界の刺激に対する自分自身の反応を「測定する」、③現象の因果関係を「考察する」、という実証的手続きを踏みます。これは大学の「心理学実験演習」といった形式に比較的近いと思います。このようなステップを踏むことで、生徒は「外界（物理世界）と人間の知覚（主観世界）は同じではない」ということを実感として捉えると同時に、現象そのものに「興味を持つ」ようになります。また、現象を解き明かす方法を具体的に考えたり、学んだりすることで、脳と心の関係やその現象が生じる仕組みについて理解を深めていくことになります。そして何より、授業では、科学の対象が物理世界（自然科学）に限られたものではなく、「人間の反応や行動も科学の対象（人間科学）に成り得る」ということに、生徒自ら気づくようになることに重点を置いています。

生徒たちの声

実際に授業をしてみると、当時、私たち研究メンバーの予想をはるかに超える!?コメントがたくさんありました。例えば、中学1年生（12歳女子）では「自分の体のほんの一部のことなのに、知らないことがとても多かったことに驚いた。科学は何となく、自然のことを解明していくという印象があったけれど、自分のことを知るというのも大きな目的だということに気づ



Profile — 池田まさみ

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了。博士（学術）。専門は認知心理学，実験心理学，発達教育工学。著書は『認知心理学演習 日常生活と認知行動 応用・実践編』『認知心理学演習 言語と思考 基礎・理論編Ⅱ』『臨床心理学事典』（いずれも編著，オーム社），『最新 心理学事典』（分担執筆，平凡社），『視覚系による3次元曲面上の対称構造の検出』（風間書房）など。

いた。むしろ，自分というものを知る，というのが科学の目的のような気さえした。また，高校生（15歳女子）では「今まで私の考えていた心理学という学問の概念が一変した。普段，私たちが不思議だなと思っていた錯視が心理学に結びつくなんて思いもしなかった。心理学に実験をメインにもってくる学び方があったなんて。驚きと新たな発見の連続だった」。他には，「正しいものが一つではない，ということが私にとって一番の魅力である。人それぞれが異なった考えをもっているため，どのように納得させるのか（実証するのか），ということが課題であることも分かった」などです。出前授業を行ったことで，改めて，児童・生徒たちの「心理学」に対するイメージや理解を知ることとなり，私自身，多くのことを彼らから教わりました。

授業を終えてみると，学年問わず全般として，生徒は「心の科学≠科学」から「心の科学<科学」へと理解が移行するようです。願わくは，出前授業が単発的・短期的な効果に留まらず，授業後もさらに，生徒自ら心理学的な現象について問題や課題を発見し，その現象について，「研究したい」「追究したい」という気持ちになってくれれば，そして将来，心理学博士が誕生してくれれば嬉しいと思います。

出前授業の意義と展開

冒頭で紹介した「高校生のための心理学講座」は今年で3年目を迎えます。最近では，心理学に限らず，大学ではオープンキャンパスと同時に，高校からの出前授業の依頼が増加しているようです。特に，高校生にとっては大学での授業の様子や実際の研究内容を具体的に知ることは，進路選択に関わる情報として重要です。こうした取り組みは，入学後の学習意欲の維持など，一定の成果につながっていると思いますが，一方でそろそろ，今後の展開としては，システ

マティックな体制も欲しいところです。

例えば，どこかに心理学出前授業の窓口を一本化し，授業を担当する教員を登録制などにより募り，依頼者の希望（心理学の分野，会場，日時など）に応じて講師を派遣するなどです。しかし，その実現には出前授業に関する講師間での共通認識や擦り合わせ，また講師のスキルなどの側面も含めてクリアしなければならない問題や課題が多いことも事実です。

私自身の活動としては，出前授業だけでなく，現場の先生方が自ら（例えば「錯視」の実験）授業を行えるような授業マニュアルや教材の開発を続けていきたいと考えています。現在，日本基礎心理学会では「心の実験パッケージ委員会」が設置され，研究や開発のスペシャリストの先生方と科学館での講演やアプリケーション開発に携わる機会をいただいています。またここ数年は，SSH（スーパーサイエンスハイスクール）を実施している高校から，「クリティカルシンキング」に関する授業依頼などもいただきます。自然科学と人間科学に共通する「科学的思考」の重要性にますます注目が集まりつつあると実感しています。

これからも，「心理学の魅力」「面白さ」を伝えていきたいと同時に，人間科学としての心理学に興味をもって研究したいという学生が増えることを心から願っています。

